

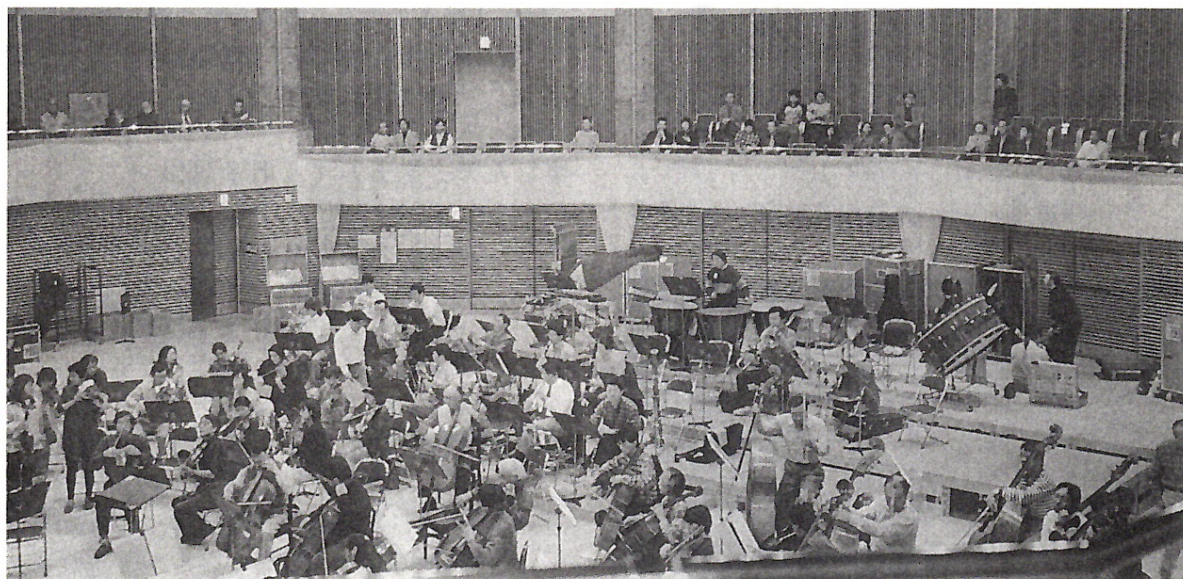
## 第4号

# 札幌響くらぶ

発行／札幌響くらぶ  
 (財)札幌交響楽団内  
 札幌市中央区中島公園1番15号  
 (札幌コンサートホール内)  
 電話 011-520-1771  
 F A X 011-520-1772

## 厳粛な中で、熱気にあふれる音作り

### 札幌響くらぶ員 札幌の練習を見学



10月5日日曜日、札幌芸術の森アートホールで札幌響の練習が行われました。「札幌響くらぶ」の会員60人ほどがこの会場にお邪魔して、練習をほんの少しのぞかせていただきました。

この日は、10月8日に行われた定期演奏会の一回目の練習日でした。指揮をなさる山下一史さんは開口一番、「本番には、今日お聴きになったものとは全く別な音に生まれ変わっているでしょう。今日ここにいらしゃった方は必ず聴きにきてください」と冗談交じりの口調で述べられ、すぐにまじめなお顔で、譜面を見ながら楽員の方々に細かに指示を出されていました。

演奏を開始すると、山下さんはすぐに音を止め、何度も何度もパート毎にさらに細かい指示を出します。楽員からも確認や質問が次々と出てきます。20分も経つと、山下さんも楽員の方々も汗でびしょりで、各自持ってきたタオルやハンカチで手や顔を拭かれます。一番汗をかいていた山下さんは、なぜかいちばん小さいハンカチで一生懸命に汗を拭かれています。そんな中、終始、演奏を始める前には必ず、「〇〇〇をお願いします」と口癖のようにおっしゃる山下さんののていねいな言葉がとても印象的でした。

厳しいと思われるほどの音に対するひた向きさと、お互いに尊敬しながら、よい音を作るといふ一つの目標に進んでいるオーケストラの姿を見せていただきました。

さて、本番の音はいかがでしたでしょうか。練習を見学させていただいた後に聴いた演奏では、普段とは一味違う感激を味わうことができたのではないのでしょうか。



# 指揮者にきく

読売日本交響楽団常任指揮者

お たか ただ あき  
**尾高忠明さん**

最近の札幌を聴いていない  
音楽愛好家をゲット!!



## 尾高忠明さんのプロフィール

1947年鎌倉生まれ。  
桐朋学園で斎藤秀雄氏に指揮法を師事。  
71年N響を指揮し、デビュー。  
72年ウィーン国立アカデミーに留学。  
74年から91年まで東京フィルハーモニー交響楽団  
常任指揮者。91年4月から同団の桂冠指揮者。  
81年から86年まで札幌正指揮者。  
87年から95年までBBCウェールズ交響楽団主席  
指揮者、96年から桂冠指揮者。  
92年から現在の読売日本交響楽団常任指揮者、95年から  
紀尾井シンフォニエッタ東京のミュージカル・アドバイザー／  
首席指揮者に就任し、現在に至る。

1997年9月9日、2日目のリハーサルが終わった後、ホテル・アルファ札幌のロビーで、読売日響常任指揮者の尾高忠明(おたか ただあき)さんに、お話をうかがいました。

尾高さんは、9月11日に、札幌コンサートホールで行われた札幌第394回定期演奏会の指揮をなさいました。

—— 国内と海外での活動の比率はどのくらいですか。

尾高 —— 日本が40%くらいですかね、外国が60%。  
—— スケジュール管理は、自分でできるのですか。

尾高 —— それはもう、マネージャーとの力関係ですよ。でも、幸いなことに、僕のマネージャーはみんな、僕が休みたいと言えば、取ってくれますけどね。

## 楽しんで、励ましてくれる聴衆

—— 欧米と、日本でのクラシック音楽の聴かれ方、楽しまれ方の違いは感じますか。

尾高 —— 明らかなのは、外国だと楽しんでくださいなどという言葉は絶対必要ない、そのために来てますから。楽しんでる上に、こちらが励まされてる感じだね。そして、今日はちょっと残念だったねぐらいは言っても、今日のは良くなかったと言いたくて、来ている人が非常に少ない。日本の場合、やはり批判的な聴き方をする人が多いんじゃないかと思えますね。

札幌で考えると、札幌はすごくうまくなったし、皆さんは札幌くらぶですから、楽しんでくださっているでしょうが、札幌近郊を含めた人口から見ると、クラシックの音楽愛好家は、もっといっぱいいるんじゃないかと、僕は思います。その中で、札幌をちゃんと最近聴いていない人たちが実はまだまだ多いんじゃないか。オーケストラの方から、もっとそういう人たちに近寄って行って、取り込んでいけないんじゃないかと思えます。

それに、新しいホールがオープンしたことで、増えたお客さんを逃がさないようにしないと。

## 拍手のよく聞こえるホールが、いいホール

—— もう、新しいコンサートホールの中はご



覧になりましたか。

尾高 中は見ました。音は、まだ聴いてないけど、でも、東京に聞こえてくる範囲では、キタラはととてもいい評判ですから。

僕は、ホールの設計者に、いいホールというのは、一に音がいいこと、二に拍手が音楽家に大きく聞こえることって、よく言うんですよ。みんな、エッと言うんだけど、大事なんですよ。演奏家は、特にオーケストラは楽員も指揮者も、2回も3回もステージに出入りする訳ですから、1曲目、2曲目で拍手が大きく聞こえると、音楽家も人間ですから嬉しくなって、お客が喜んでくれると、もっと乗りますね。

キタラは大丈夫なんでしょう。

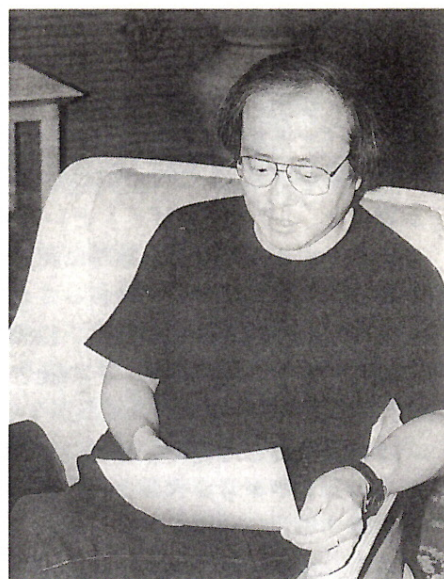
### 印象に残るエロイカとショスタコの5番

—— 以前、札幌の正指揮者をなさっていて、印象に残っていらっしゃることは。

尾高 1981年から1986年の5年間、正指揮者をしていて、もう、いっぱいありますけど、僕が雨男だという評判が札幌ではあって、僕が来ると、グリーンコンサートも流れるというので、楽員さんは結構喜んで、事務局は結構困った人だと思ってたんじゃないでしょうか。

まあ、今のは冗談ですが、札幌で一番印象深いのは、定期ですよ。エロイカをやった時の定期は、その時の楽員さんの顔まで、よく覚えているし。多分札幌も、うまくなるろう、なろうとして、すごく必死だった頃で、僕としては、札幌の皆さんとは和気あいあいと、それでいて音楽に集中できたという、すごく楽しい思い出ばかりですよ。

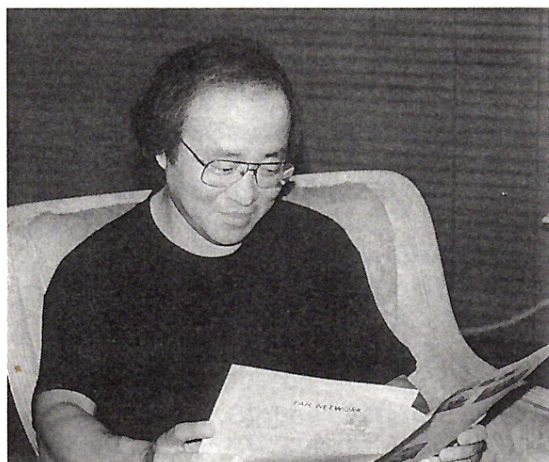
札幌との演奏会で、もう一つ忘れられな



いのが、大阪のシンフォニーホールのオープニングに、日本中からオーケストラが呼ばれた時のことです。大フィルやN響など先輩のすごいフル編成のオーケストラを差し置いて、僕たちが自分で言うのもおかしいけど、とても皆さんに喜んでいただいたんです。中村紘子さんとチャイコフスキーのピアノ・コンチェルトと、ショスタコーヴィッチの5番だったんですけど、あの時のショスタコの5番はやっぱり思い出深いですね。だから、今年の3月の東京公演もそれにしたんですよ。(注：ザ・シンフォニーホール開館記念オーケストラ・シリーズは1982年10月)

—— 札幌のお客の反応はいかがですか。

尾高 定期では、熱狂的ではないけど、暖かい感じはすごくしましたよね。拍手の音はするけど、どういう気持ちからの拍手なのかが、こちらに伝わってこないのが一番イヤですから。あの頃の定期会員は、今よりも少なかったかもしれないけれど、札幌を守ってくださってるという非常に暖かい感じがとてもありましたね。



「札幌くらぶ」第2号を手にする尾高氏

### アワビとゴザと津波と——思い出深い奥尻島

—— 道内を札幌とあちこち回られたと思いますが。

尾高 一番遠くではないけれど、奥尻島が思い出深いですね。島の一周を案内していただきながら、エゾアワビを採ってもらって、どうやって食べるのかと思ったら、海水でシュッと洗って、おいしかった。

演奏会の会場が小学校の体育館で、ゴザ



や座布団を敷いて、ストーブみたいなもの置いてあって、大人も子供もみんなワァーッと集まって来てくれた。これは大変だろうなと思っていたら、「新世界」で、ターンタンタカターンとティンパニーの音が響くと、「ワァーすげえ」という声が聞こえたりするんだけど、意外に反応がすごく良くて、本当に音楽を味わってくださったという記憶があります。(注：1980年7月)

地震のあとの奥尻島は、その後どうですか。

—— はい、復興した奥尻を見てくださいというイベントやキャンペーンを、色々やっています。

尾高 ああ、良かったですね。

### 指揮者に必要なのは愛情と、 運転手&車掌の二面性

—— 指揮者に必要な要素は何でしょうか。

尾高 すごくキザに聞こえるでしょうし、僕もキザだと思いますけど、結局愛情だと思うんですね。音楽に対する愛情であり、プレーヤーに対する愛情であり、聴衆の方に対する愛情かもしれない。そういうものが、舞台上で出て来るんじゃないかという気がしています。どんなに優れた人でも、愛情がない人は、指揮者に向いていないんじゃないかと、僕は思います。

—— 80人とか100人のオーケストラを相手にする訳ですから、人間が嫌いな人は多分向いていないのでしょうか。

尾高 それは、もう一番かわいそうな人です。多くの人を好きになれない人は、指揮者になれないと思います。

僕は次男坊で、柔軟性のある考え方をするような方向に育てられたから、自然にやれるんだと思います。楽員さんを始め、いろんな人の良さを、わかってあげようとしてなくても、わかるんじゃないかな。

うちの親父が指揮と作曲で苦勞して、若くして亡くなっていたので、お袋から、「仕事は何でも選びなさい。ただし音楽家はやめなさい。指揮と作曲は特にやっちゃいけない。」と言われていたのにも関わらず、僕

は自分になりたくて、指揮者になった訳ですが、そういう性格で良かったなと思っています。

よく、僕が棒を教えてて言うのは、指揮者は列車の運転手であり、車掌でなくてはいけない。運転手がエンジンを入れないと列車は走り出さない、そして、オーケストラが走り出したら、ちゃんとみんなが脱線せず、いい感じで走ってて、乗客もいい感じで座っているかどうか、後ろで見ている車掌が必要だと。その二面性が指揮者の中にないと、いい棒振りじゃないんだと。

—— ライフワークとして、取り組んでいらっしゃることは。

尾高 僕の棒振りとしてのスタートは、最初がN響で育って、次が東京フィルで、その後がBBC、そして読売日響ですから、全部放送局がらみのオケ。何でもやらなきゃいけない、何でもできなきゃいけないというふうに育ちましたから、現代音楽も、古典も、ロマン派もやってきましたけれど、一番、僕がやりたいのは、昔からマーラーとか、リヒャルト・シュトラウス、ワーグナーなどのいわゆる後期ドイツロマン派なので、もう、そろそろ絞って、50歳以降そういうものを中心にやっていきたいなと思っています。

### 《臨時インタビューの感想》

誌面では紹介できませんでしたが、ロンドンでの子供のためのコンサートのことや、15歳の時、N響でワーグナーを聴いて、突然指揮者になると決めたこと、指揮者=現場監督なこと、大沼での釣れなかったヘラブナ釣りのこと、CBEの爵位の授与が決まって、オーケストラ仲間の態度が豹変したことなど、臨場感あふれる話ぶりで、たくさん聞かせていただきました。(とても楽しかったけれど、あとのテープ起こしが大変だったというのは、単なる言い訳です。)

尾高さんが心配してくださった奥尻島に、いつか札幌と一緒に行っていただけるといいのにと、心から思います。

12月のロンドン交響楽団のデビューの成功と、演奏会が、日本のテレビやFMの音楽番組で、できるだけ早く放送されることを願っています。

(T.K.)





## 札幌物語 V

### 札幌三人のファウンダー (下)



札幌市民交響楽団（現札幌交響楽団）が出来た昭和35年は北海道銀行の創立10周年に当たりました。札幌交響楽団を創るに当たり道銀は10周年記念として楽器の購入費のために500万円を寄付しました。この頃、札幌の教員の初任給は1万2千円位でした。

北海道銀行の初代頭取の故島本融氏は、戦前、大蔵省からの駐在員としてベルリンに暮らしていらっしゃいました。バイオリンの勉強のために留学していた札幌の初代常任指揮者故荒谷正雄氏とはベルリン時代の旧知の間柄でした。

近衛秀麿氏を始めとする東京のオーケストラからのコンサートマスター就任の誘いを断り続けた荒谷正雄氏と北海道銀行の頭取に就任した島本融氏は札幌で再会しました。

元々、文化に造詣の深い島本融氏は画家の木田金次郎の応援をしていましたが、荒谷正雄氏のオーケストラ作りにかかる情熱に共鳴し、楽器購入費の寄付をし、副理事長に就任しました。

故荒谷正雄氏は昭和11年から昭和20年までベルリンに滞在して、ドイツが敗戦、ソ連が日本に参戦するきわどい狭間を縫ってシベリア経由

で日本へ強制送還されました。

日本人として初めてヨゼフ・シゲテイのレッスンを受けた本格的なバイオリン奏者です。帰国後は札幌に住み、ベートーベンのバイオリン・ソナタ連続演奏会や室内楽の演奏会を開き、昭和23年には札幌音楽院を開設されました。札幌音楽院は多くの優秀な音楽家を世に送り出しました。勿論、日本や海外で活躍するプロの演奏家を排出していますが、「プロを育てるための音楽院ではなく、プロより優秀なアマチュアの音楽愛好家を育てること」を目的とされました。札幌にはプロの音楽家になるためのと同じ訓練を受けた大勢の優秀なアマチュア（職業にはしない）バイオリン奏者が誕生しました。

札幌が誕生してしばらくは「独特の澄み切った北の音」を奏でる大勢のアマチュアの弦楽器奏者達がベースになりました。

去る8月16日「荒谷正雄先生の偉業を偲ぶ会」MASAO ARAYA MEMORIAL CONCERTで遺族の荒谷雄氏に札幌の理事長北川日出治氏から名誉創立指揮者の称号の楯が贈られました。（Y.T.）

### オーケストラなんでもQ&A

Q. 待望のコンサートホールにはパイプオルガンが設置されていますが、奏者は指揮者に背を向けて演奏しているのに、どうやって指揮棒を見るのですか。

A. 以前はオルガンの横に鏡を置いて指揮者が見えるようにしていましたが、最近ではモニターテレビを設置している場合が多いようです。札幌コンサートホールもこの方式です。

Q. 今年、ウィーン・フィルに女性の楽団員が入ったことが大変な話題になっていたのですが、オーケストラは本来男性の職場なのではないでしょうか。

A. 昭和41年4月19日に札幌市民会館でカラヤン、ベルリン・フィルの公演があり、終演後市民会館食堂でベルリン・フィルと札幌との交流会がありました。その時、ベルリン・フィルの楽団員が「今日は女性（ハーブ）が一人いて残念」のような発言をしました。「どうして女性はいけないの」と問い返したら、「ウィーン・フィルには一人もいないし、美人がいると目移りがして、演奏に身が入らない」とカラヤンも入れたがらない、とのことでした。そのカラヤンも晩年、女性のク

ラリネット奏者を採用すると自ら言い出して一悶着起こしたことがあります。

以前は、男性の職場だったのかもしれませんが、現在は、優秀な演奏者は男女の別なく積極的に採用されます。

Q. 演奏最中にヴァイオリンなどの弦が切れたときは、どうするのですか。

A. ヴァイオリンの場合、弦の切れた楽器を後ろに座っている奏者へ順送りにし、一番後ろの奏者が弦を張り替えにいきます。弦の切れた楽器を後ろの奏者に渡す際に、弦の切れていない楽器を前の奏者に渡しますので、そのまま演奏を続けることができるわけです。

ヴィオラはヴァイオリンと同じ方法です。コントラバスの場合、弦の切れた楽器を演奏している本人が弦を張り替えにいき、楽章間で舞台に戻っていきます。チェロは、上記のいずれかの方法をとります。





## PLAYER'S TALK

札幌交響楽団 ライブラリアン

たなか まさき  
田中 正樹 さん

(有) 札幌ステージオフィス

まつもと りょうえい  
松本 了英 さん

ライブラリアン 田中正樹さん

演奏会場に足を踏み入れた時、ステージ上に椅子が並べられ、楽譜、楽器がセッティングされています。それが、ステージ・マネージャーの海藤さんと松本さん、ライブラリアンの私たち3人の仕事です。

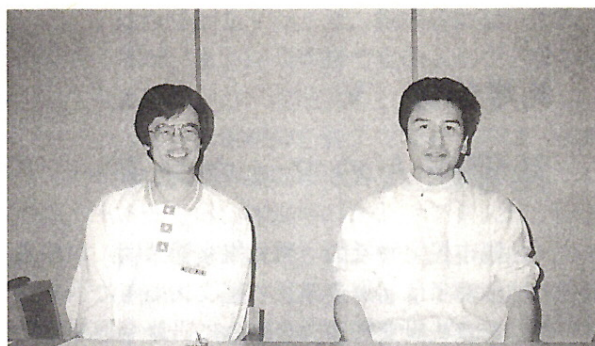
ライブラリアンの仕事は、単純に言えば、演奏会で演奏することが決まった曲の楽譜の手配です。

団で持っている楽譜を使ったり、レンタルの楽譜を取り寄せたり色々ですが、レンタルだと、国内に在庫がなければ海外から取り寄せることもあり、だいたい使用する日の1月前に手許に来るように手配します。それを演奏会の各バインダーにセットして、ヴァイオリンなどの弦楽器は2人で1つ、管楽器は1人に1つと、練習や演奏会で譜面台に並べて、終わったら、また、もとに戻してという繰り返しです。

それから、指揮者が本番でもスコアを使用する方なら、ステージ上の指揮者用譜面台にスコアをセットしに行きます。また、コンチェルトで、たとえばピアノをステージ前にセットするという時も手伝ったり、スムーズに演奏会が進行するよう、お手伝いしています。

札幌の裏方3人組

アマチュアで、打楽器をやっている人が、たまたま、ステージ・マネージャーの海藤さんと知合いで、紹介してくれたのがきっかけで、19歳の時に初めて楽器運びのアルバイトで来て、今、32歳なので、途中ちょっと抜けたりはしていますが、10年以上こう



松本さん<sup>Ⓢ</sup>と田中さん

いう仕事に関わってきました。アルバイトや、松本さんのステージ・オフィスで使ってもらったりして、札幌の職員になったのは、3年前からです。

当時、札幌にはライブラリアンがいなくて、海藤さんが兼務しているような形で、練習譜を作るからコピーをと頼まれてやったりしている内に、担当になりました。ライブラリアンになるための専門の学校がある訳ではないので、絶えず現場で経験して覚えていくしかないと思います。

リーダーの海藤さんを始めとする札幌のスタッフ3人は、收拾が着かない時は着かないけど、結構仲がいいんです。

オーケストラ・プレイヤーがソロでリサイタルや室内楽を行っているので、オケとは一味違って、そちらもおもしろいと思います。ぜひ足を運んでいただけたら幸いです。

私たちにとっては年間130回くらいある演奏会の中の1回でも、聴きに来てくれるお客様にとっては、年に1回なのかもしれないから、その1回1回を大切にしなければと思います。

松本了英さん

私は、正確には札幌の職員ではなく、札幌ステージ・オフィスという会社の人間です。

私の仕事は、本番に限って言えば、芸術の森のアートホールから、その日に使う楽器を全部トラックに積んで、本番会場に運んで、降ろして、ステージに配置して、終わったら、またステージをばらして、楽器を芸術の森まで運ぶというのが1日の仕事なんです。札幌通運のトラックで専用車が1台あって、車は前の方があまり揺れないので、ケースの中の楽器がどういうものかわかった上で積み込まないと、並べ方が少しずれただけで、全部入り切らないということが結構あります。

海藤さんは、会場のステージに椅子を並べて、譜面台を立てて、ホールの人と山台を作ったりと、分担していますが、最終的な判断は、海藤さんが取り



仕切るんです。3人とも血液型がO型なので、合っているのかもしれませんが。

あとは、照明の指示、お客をホールの中に入れたり、楽員をステージに出したり、花束贈呈の合図というような本番の進行をやります。演奏の後、拍手の様子を見ながら、指揮者やソリストをステージに出すのもマネージャーの仕事ですが、アンコールをしない内に拍手が切れたら困るので、無理やり出すこともあります。

その他に、ホールや主催者との打合せもありますし、暖房のない体育館でやる時は、工事現場で使うジェット・ヒーターを持ってきて、始まる間際まで暖めたりすることもあります。

### 定期会員からスタッフに

ステージ・オフィスとしてやっているのは、10年くらいで、学生時代から入れると20年以上たちます。岩城さんが指揮者になったばかりの頃、私は聴くの



が好きで、定期会員だったのですが、大学生でしたから、お金がないんです。いつも見ると、演奏が終わった後、ステージを片付けているのは、もしかするとアルバイトじゃないかなと思って、札幌の事務所に行って、アルバイトをさせてくれと、今年の春退職された渡辺悦子さんに話をしたら、次に海藤さんが出て来て、「そんな細い体では無理です。」と言われて。でも、何とか少しづつ力がついてきて、ケース込みで70キロあるハープも運べるようになりました。

### 日本のモルダウがチェコのモルダウに

今までで記憶に残っている指揮者は、チェコ・フィルのノイマンさんです。練習からずっと聴いていると、たとえば、モルダウが、最初は普通のモルダウなんだけど、指揮者のもって行き方がすごくうまくて、だんだんチェコの音楽に変わって来るんです。こういう指揮者もいるんだな、札幌も指揮者によって変わるんだなと、その時思いました。

実力というか、札幌のレベルはかなり高いと思うんです。ステージの袖から、客席の反応を見ていて、お客さんが乗っていると、ああいい演奏会だったというのがわかります。いい演奏会だったなと思うと、こちらも感動するものですから、この仕事をしていて良かったと思います。

## from 「札幌くらぶ」

会報4号をお届けします。冒頭記事のとおり、10月5日には札幌の練習見学に60名のくらぶ会員が訪れ、約1時間指揮者と楽団員の緊張感あふれる音作りの現場に立ち合わせてもらいました。会員の中には子供たちを同伴された方もあり、その子らの感想を聞くと、「指揮者って、あんなに偉いって始めてわかった！」とのこと。すっかりオーケストラが好きになりましたようです。

くらぶにとって嬉しいことがあります。何人かの方々から、くらぶにぼつぼつと意見が寄せられるようになったことです。年2回の交流会にとどまらず、コンサートの後1時間くらいでよいから感想を語りあえる機会を作ってはどうか。札幌のファンになって2年半という方からは、会報の紙面作りに新鮮な提案と「何かお手伝いしましょうか」という、本当にありがたいお

言葉も。札幌くらぶの活動は未だまさぐり状態ではありますが、子供たちの反応や様々なご意見を頂戴すると、札幌を支える新しい力が生まれつつあることを感ずることが出来ます。これがくらぶ事務局の元気の素であり、より多くの皆さまにご入会いただいで共に活動することを呼び掛けたく存じます。

11月27日(木)午後6時30分から、今年2回目の会員と楽団員の交流会を行います。会費3000円で少しお酒を飲みながら、音楽のこと、札幌のことを、楽団員の方々とともに語り合いたいと思います。会員の皆さま、ふるってご参加下さい。まだ会員になっていない方、この機会に入会しませんか。楽しいですよ。

入会受付は、札幌事務局または定期演奏会会場で行っております。年会費2000円。



# FAN NETWORK

## ぞくぞくする新ホールの音響

「うーん、今夜のコンサートは、素晴らしかったなー、演奏されているみんなも輝いて見えたし、さぞ練習も大変だったろう……」なんて、自分の音楽的尺度で余計な批評も楽しくなりました。知人に誘われて札幌くらぶに入会したせいと思われま。

春の札幌くらぶの交流会にも参加致しました。緑の中でのミニコンサートも心を和ませ、楽員の皆様のユーモアたっぷり、そんな中にも真摯な気持ちと意欲ある姿勢にとっても感激しました。私が札幌に抱いていたイメージが変わりました。

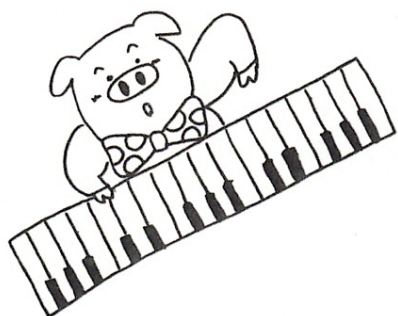
もちろん微力ですが応援の気持ちから友人も誘い維持会員にも登録しました。以来毎月欠かさず楽しくしております。

今年は、立派な音楽ホール「キタラ」が完成して、一段と素晴らしい音響の中で、先日の定期演奏会も楽しむことが出来ました。大満足です。とにかくぞくぞくする演奏の時には、惜しみなく大きな拍手で応援します。たくさんの方の聴衆と自然にスタンディング・オベーションで感動を伝える時もあるかと思えます。

札幌くらぶの輪が広く大きくなり地元の人々が愛し、応援する札幌になります様、さらなる前進を期待します。

心豊かな力を与えて下さる札幌に乾杯！

西区 主婦 江本 久枝



## 緻密な音作りに驚嘆

先日、指揮者や山下一史さんによる定期演奏会の練習風景を見学させていただきました。当日が最初の練習だったそうですが、始まる途端に音楽の専門用語が次々と飛び交い、山下さんの交響曲への思い、ペンを片手にした楽員の方々の疑問……、熱気ある会場とは反対に無言で聴き入っていました。同じ楽譜を奏でながらまるで違った印象の曲になっていくということが実感として理解できた気がします。

指揮者と札幌側両方のご好意で実現したとのこと、短い時間ではありましたが、ステージでは想像のつかない様子を垣間見ることができた「札幌くらぶ」ならではの貴重な体験でした。札幌 N.J.

## 楽員との距離縮める交流会

5月の札幌くらぶの交流会はとてもユニークで楽しいひとときを過ごさせていただきました。上田弁護士の紹介で、特にクラシックに興味があるわけではないのに何げなく入会。しかし、交流会に出て「やっぱり、生の演奏は素晴らしいな」と思うようになりました。上田事務局長の弁護士とは思えない(?)名司会ぶりで始まった交流会はビールあり、演奏あり、札幌の方の自己紹介ありと盛り沢山。特に札幌の方々の自己紹介はとてもユニークで、「クラシックをやる人は堅い(すみません)」というイメージを完全に覆されました。「演奏家と聴衆」との距離がいっきよに縮まったような感じを受けました。

最近全国的にいやな事件や事故が続いています。そういうときに素晴らしい音楽に触れるとほっとするときがあります。札幌の方々にはこれまで以上に北海道の人々に感動を与えるような名演奏をお願いします。

札幌 志田 勉

## 編集後記

今回の「指揮者にきく」は、来春から札幌のミュージック・アドバイザー兼常任指揮者に就任することになった尾高忠明さんに、たまたまタイミング良く登場していただきました。

尾高さんが読響と中国への演奏旅行に出かける前に、原稿を見ていただかなくてはと、シンデレラのように真夜中、24時間営業の中央郵便局に駆け付ける直前、何気なく道新の夕刊(10月9日)を見たら「札幌常任指揮者に尾高氏」という記事が載っていて、「そうだったのかァ」

と納得しました。

実は、札幌くらぶ取材クルー(と言っても、カメラマンと私の2人だけ)のインタビューの直前、道新の古家記者(昨年12月の交流会でお話をしてくださった方です。)が、尾高さん取材していたのです。その時の内容は、10月18日の夕刊に大きく出ていましたので、ぜひ捜して、プロの記事をもう一度読み返してみてください。

(T.K.)